

小・中学校の教育レベルを国際水準に

— 英国式学校評価の導入や日本の教育から学ぼうとするドバイの取り組み —

前ドバイ日本人学校 校長

静岡県裾野市立深良中学校 校長 鈴木 史 良

キーワード：在外教育施設，ドバイ教育事情，学校評価，国際水準

1. はじめに

私がドバイ日本人学校に赴任した3年間は、ドバイが中東のハブ都市として大躍進しているさなか、世界的金融危機やドバイショックの波を受けた年でもあった。2008年4月赴任時の児童生徒数が189名、2年目が237名、3年目が171名と推移したが、この数字の高低がドバイにおける日本企業の経済活動の勢いを物語っている。

ドバイ日本人学校は在ドバイ日本国総領事館付属の私立校だが、同時に現地教育局にライセンス登録しているため、現地教育局からの指導を受けることも多い。そのようななかで、経済や観光だけでなく、教育も世界水準に近づけたいというドバイ教育局の姿勢を強く感じた。以下、2～4に自国の教育改革に取り組む3つの事例を紹介したい。

2. ドバイ教育局による学校評価

2008年秋、ドバイ教育局内に新設された学校視察部局は、管内の小・中学校長を招集し、すべての学校を対象とした学校視察実施に向けて説明会を開催した。これは教育行政がそれぞれの学校の教育実践について客観的な評価を行い、学校改善を促し、その学校のもつ教育力を高めることをねらいとするものだ。この時に講演した英国の大学教授が「セルフ・エバリュエーション（自己評価）」という言葉が頻繁に使っていたことを考えると、ドバイ教育局も世界的な潮流に従って学校自己評価システムの構築を急ぎ、国際水準まで教育レベルを向上させようとする意図が感じられた。

2009年2月上旬、予告通りに教育局から派遣された学校視察団が来校し、3日間にわたって本校の教育活動を視察した。視察団のメンバーはアメリカやイギリスから呼び寄せた教育の専門家たちであった。同年4月には学校長宛に評価結果が掲載されたハンドブックが送付された。ドバイの公私立小中学校合わせて189校が優（2.1%）、良（34.9%）、可（51.4%）、不可（11.6%）の4段階に評価され、他にも新聞やホームページに公表された。本校の総合評価は「良」であった。本校のもつ強みと弱みが明示され、改善点も指摘された。さらに同年5月末までに改善策を明確にした「アクションプラン」を当局に提出し、かつ保護者にも公開することが要求された。

視察団から、このような大がかりな学校視察は3～4年に1度だろうという言葉があったせいか、当初私たちは高を括っていた。しかし、ドバイ教育局は本気で取り組んでいた。翌年1月、再びこのような大がかりな学校視察が、本校の運動会直前の忙しい時に実施された。

この年の事前提出書類は次の通りであった。① School Profile，② 前年度アクションプラン，③ 学校改善計画，④ 学校教育の質の向上についてのレポート，⑤ 主要科目の試験結果過去3年分，⑥ 学校経営グランドデザイン，⑦ 職員リスト（年齢，担当教科，仕事内容等），⑧ 週時間割表，⑨ 学校ロケーションマップ及び校舎配置図，⑩ 学校要覧，⑪ 出席状況調査表，⑫ 教師陣についての詳細，⑬ 教職員，保護者代表，日本人会代表，児童生徒代表と



視察団一行と学校玄関前で

の面接日程表、⑭主要教科のLesson Descript（授業案）。他にも直接ドバイ教育局ホームページの質問事項に答える保護者用ウェブ事前アンケートも実施された。

当日、午前7時15分に本校に到着したのは、視察団リーダー、マンチェスター大学教授のピーター・ケイブ氏、アメリカの教育コンサルタント、ヘンリー・モリタ氏、英国の学校視察官、ロブ・アイザック氏、マレーシア在住の英国教育コンサルタント、イアン・カー氏、ドバイ教育局係官でアラビア語、イスラム教育を視察するザイード氏の計5名。評価対象項目は、①主要教科（アラビア語、イスラム教義、英語、国語、算数・数学、理科）の習得状況、②児童生徒個人及び社会的な発達状況、③教授指導と学びの状況、④児童生徒の実態とカリキュラムの整合性、⑤児童生徒の支援と保護状況、⑥学校の管理運営とリーダーシップ、⑦学校の総合的なパフォーマンス、の計7項目だ。

視察は、まず校長のプレゼンテーションからスタート。私は視察団に明治以降の日本の教育の流れ、日本の教育の目的、海外日本人学校設立の意義、ドバイ日本人学校の特徴などについて説明した。次は視察団リーダーのケイブ氏との個人面談だった。ケイブ氏は昨年視察に来校した視察団の一人で、日本語力はかなりのものだ。私は従来の職員組織を改め、児童生徒数の急増に対応できる新たな組織に改編したこと、学校のねらい達成のために組織マネジメントの手法を導入し、目標管理しながら学校改善を図っていること等を説明した。他の視察官らはそれぞれ担当教科別に授業を参観したり、教職員、PTA会長、運営理事長と面談をおこなったり、昼休みは昼食をとりながら児童生徒代表と歓談したりと、忙しい中で休む暇もなく、精力的に活動した。

視察団は3日間の日程をやり遂げ、口頭での講評を残した。2年連続「良」評価であった。本校の優れた点や強みについて数多く言及してくれたが、改善点はアラビア語の時数が少ないこと、英語の達成度がヨーロッパの国々に比べるとやや劣ること、理科室が狭く設備もよくないこと等だった。文部科学省の学習指導要領に準拠し、国内標準時数に加えて全学年で英会話週2時間、アラビア語週1時間を組み入れているため、これ以上の余裕はないのだ。理科室の施設設備の充実も大きな課題だが、数年内に校舎移転を控え、現校舎の増改築はできないのが現状である。一方、本校の視察のために毎年これだけの人材を海外から呼び寄せるドバイ教育局の熱意には恐れ入る。

3. 現地校が興味をもつ清掃活動

ドバイの英字新聞「ガルフ・ニュース」社から子どもたちの清掃活動について取材をしたいと電話があったのは2009年の入学式が終わった翌週のことだった。私は二つ返事で了解した。4月中旬のある朝、ガルフ・ニュース社から女性記者がやってきた。私は彼女を案内し、校内いたるところで活動している子どもたちの姿を見せて回った。ドバイ日本人学校は日本の学校のように下足を上履きに履き替えず、下足のまま教室に入る。そのため、清掃は箒でゴミを取った後、モップで水拭きをするのが常である。彼女は清掃の様子を見ながら私にさまざまな質問したり、清掃中の子どもたちに直接インタビューしたりした。

新聞記事は2009年5月21日の紙面を飾っていた。大きな写真1枚に小さな写真3枚の記事だ。第1面の新聞名の付近に、「子どもたちがペンばかりでなく、箒も使う学校」という小さなリードが書かれている。ページをめくると、すぐにゴシック活字の見出しと清掃する子どもたちの写真が目飛び込んできた。以下は記事（原文英語）を引用する。

A CLEAN SWEEP: クラシック音楽が流れ出すと、ドバイ日本人学校の子どもの一人が床を掃き始める。他は床をモップで拭き始め、また他は植物の水やりに急ぐ。トイレに行くと、別なグループが床や洗面台をゴシゴシこすっている。この様子を見て、子どもたちは何かの罰を受けていると勘違いする人がいるかもしれないが、真実はその反対だ。「学校をきれいにすることは、子どもたちが自分たちの環境に敬意を払い、



現地校が注目する清掃活動

感謝することなのです。」と鈴木校長は説明した。「日本ではたいの学校の清掃活動を実施しており、ごく普通のことです。」

この学校に専門の清掃員はなく、年に3回外部の清掃員を雇って清掃するだけである。毎朝8時に清掃開始のアナウンスとともに、小学1年生から中学3年生までの子どもたちはゴミを掃いたり、モップで拭いたりすることから植物に水やりをしたり、トイレを磨いたりすることまで割り当てられた仕事に取りかかる。

「この活動は子どもたちを教育していく過程で大切な役割を担っています。」と校長は説明し、全教職員が清掃に参加していることを付け加えた。

237名の子どもたちは、学年を超えて7～10人のグループに編成され、年長の中学生が班長となっている。清掃後は班別に自己評価をおこない、班長は班員たちの清掃ぶりがよかったかどうかを記録用紙に記載している。

本紙記者がある班に、家でも自分で清掃をしているかと尋ねると、半数以上の子どもが手を挙げた。しかし4年生のある女子は、家ではほとんどお手伝いをしないそうだ。

「私は時々部屋の掃除や、皿洗いをしたりするけれど、ほとんどお母さんがやっています。」

「おそらく清掃員を雇っている家庭も多いと思われますが、ここでは子どもたちにどのように清掃するかを教えることもわたしたちの仕事のひとつです。」と鈴木校長は言う。3年生の担任である上田教諭は「子どもたちが清掃活動することで問題が起こったことは一度もありません。家庭でも自分のことは自分ですることを学ぶことは、算数や理科を学ぶと同じくらい大切です。」と語った。(以下略)

この新聞報道以来、日本人学校を訪問し、清掃活動を見学したいという現地校が少なくない。本校を訪問した現地校の中で、実際に清掃活動をやり始めたこと誇らしげに語る校長もいたほどである。

4. 国際教育カンファレンスに参加して

ドバイの隣にシャルジャ首長国がある。ドバイと同じくアラブ首長国連邦の一つだが、商業、観光産業が盛んなドバイに比べ、宗教や教育に熱心な国である。2010年4月に入ってまもなく、この国の教育局から2日間の日程で国際的な教育カンファレンスを開催するので、日本人学校も参加してくれないかとの打診があった。とかく海外の日本人学校は現地教育との交わりが少ない傾向にあることを知っていた私は、この国の人々に日本の教育について理解してもらうよいチャンスだと考え、事前に本校での実践をまとめた論文を作成し、主催者に送付した。

私に正式な招待状が届き、発表日に指定された5月3日朝、自家用車で会場となるシャルジャ大学に向かった。大学はシャルジャ市街地の郊外にあり、整備された広大な敷地に様々な建物が点在していた。芝生の緑や色鮮やかな花々が美しく、ここが砂漠の国かと疑いたくなるほどである。私がプレゼンテーションを行うシティホールはその一角にあり、ドーム型の屋根をもつ立派な建物だ。

ロビーでは教育局のヤーメン氏が出迎えてくれた。今日の日程と発表時間の確認をする。発表会場のホールに通された。天井が高く、観客席は三階までであった。随所にイスラム風の装飾がほどこされている。案内された席は最前列の主賓席だった。開式までに発表用パワーポイントの操作を確認。

初日の発表者はヨルダン、カタールの教育機関関係者、フジャイラの女性教師、それに私の4人だ。午前10時を少し回ると、シャルジャの皇太子殿下が入場され、開会セレモニーが始まった。UAE国歌の演奏、クルアーンの朗唱、殿下のご挨拶と続いた。しばらくして発表者の一人がステージに上がり、皇太子殿下から記念盾を授与された。何が始まったのかと考える間もなく私の名が呼ばれ、私も同じように登壇して殿下から記念盾を授与された。このとき殿下が私に片言の日本語で話しかけてくださった。アラビア語が理解できない私にとって、予期できない出来事の連続だった。

表彰が終わり、いよいよ発表者によるプレゼンテーションが開始となった。促されるままに発表者4人とコーデ

ネーターはステージ上に置かれた席に移動した。ここで他の発表者の発表を聞きながら、自分の出番を待つのである。3人目の発表が終わり私の番になった時、コーディネーターのアラビア語が突然英語に変わった。私にわかるよう英語で紹介してくれたのだ。私は演台に立ち、アラビア語で挨拶と自己紹介してから英語で発表を始めた。内容は、(1) 日本近代の夜明けから富国強兵政策、第2次世界大戦以降の平和教育への流れ (2) ドバイ日本人学校の歴史、設置目的と基本的なスタンス (3) 現在のドバイ日本人学校が抱える課題と信頼される学校づくりのための7つの戦略 (4) ドバイ日本人学校の教育課程、学校生活紹介等で、最後に資源小国、日本における最大の資源は「子ども」であること、近代・現代日本の発展は教育の充実によってもたらされたことを話して締めくくった。

私の発表が終わると、本で行われた4つの発表について質疑応答があった。私もいくつか質問を受けたが、隣の発表者が英語で助け船を出してくれた。日本の教師の地位や待遇、日本人学校訪問者の関心等についての質問だった。

カンファレンス第1日はこれで終了し、ロビーにあるレストランで午餐が供された。私も無事に発表が終わった安堵感に包まれ、同行したサラット事務官とともにbuffet形式のアラビック料理を楽しんだ。

皇太子殿下からいただいた記念盾は、正式名「シャルジャ・プライズ・フォー・エデュケーショナル・エクセレンス」という賞だ。華麗なアラビアン・カリグラフィの美しい盾である。私の拙い発表でも、多くの方々に日本の教育について関心をもっていただいたことはうれしく思う。このときの映像はシャルジャ首長国内のテレビ番組でも放映されたという。翌日、さっそくアジュマン首長国の学校関係者から、ドバイ日本人学校を訪問したいという申し入れを受けた。